

新刊紹介

Prof. Drs. Hi. Ibrahim Polontalo, MUHAMMADIYAH  
DI SULAWESI UTARA 1928—1990,  
CV Karya Dunia Fikir, 1995.

利 光 正 文

インドネシアのイスラム改革団体ムハマディヤに関する研究は、近年、著しく進展した。特に、ムハマディヤの掲げるイスラム改革の理念や改革運動の現状について分析した著作は、夥しい数に上る。紙幅の関係上、ここではその一々を紹介出来ないけれども、ここ5年間程に限っても優に十指を超える。総人口の約9割をムスリムが占めるインドネシアにあって、最も大きなイスラム団体の一つであるムハマディヤの動向は、国民注視的であると言っても過言ではない。加えて、ムハマディヤ独自による出版物も多いため、運動の現状分析を容易としている。しかし、ムハマディヤ運動の歴史、即ち、ムハマディヤの成立や発展に関する歴史的研究となると非常に少なくなる。これは、ただ単に史料が乏しいという問題だけでなく、ムハマディヤの活動がイスラム改革運動のみに留まらず、教育や社会福祉の分野にもわたっており、研究が煩瑣であるとの理由によるかもしれない。

所で、ムハマディヤの歴史に関する研究が少ないと述べたが、一昨年、ムハマディヤ中央本部の出版部より『ムハマディヤの歴史<sup>(1)</sup>』が刊行された。このことは、ムハマディヤ運動の研究において画期的な意味を持つ。これまで、ムハマディヤの歴史を体系的にまとめようとする試みはなされておらず、謂わば、手付かずのまま放置された状態にあったからである。しかしながら、この本の内容を見ると、取り扱われている年代が、1912～23年、1945～65年、1965～85年となっており、1923～45年の間は欠如している。ところが、ムハマディヤの歴史において、欠如しているこの間の時代は極めて重要な意味を持つ。つまり、この間は、ムハマディヤの支部があちこちに誕生し、ムハマディヤが全国区のイスラム組織として確立され、ムハマディヤ運動が飛躍的に発展する時期だからである。筆者は、かねてより、ムハマディヤ支部研究

の重要性を指摘してきたが、この分野の研究も次第に進展しつつある。ミンカバウ（西スマトラ）のムハマディヤ運動に関するタウフィック・アブドゥルラヤ・ハムカの研究<sup>(2)</sup>、南スラウェシのムハマディヤについてのマトウラダの研究<sup>(3)</sup>、中部ジャワ北岸やバタヴィアのムハマディヤ運動に関する筆者の稚拙な論考<sup>(4)</sup>等が既に世に問われている。そして、更に、その隙間を埋めるべく出版されたのがこの書である。

本書の題名は、『1928～1990年までの北スラウェシにおけるムハマディヤ』である。著者のポロンタロ教授は、北スラウェシ州の州都マナドにある国立教育大学（IKIP Negeri）のゴロンタロ（Gorontalo）分校で教鞭を執っているイスラム学者で、既に、14年前ムハマディヤ北スラウェシ地域委員会よりゴロンタロのムハマディヤ運動に関する報告書を上梓している。従って、本書は教授の長年にわたるムハマディヤ研究の集大成とも言えるものであろう。筆者は10年程前、ゴロンタロのムハマディヤ支部を訪れ、ポロンタロ教授にお会いしたことがある。

さて、本書は序論～結論まで10章の構成である。北スラウェシの中心都市マナドは、地理的にフィリピンと近い関係上キリスト教の影響が強く、イスラムがなかなか入りにくい土地であった。イスラムは、むしろ、マナドの西ゴロンタロに早くやって来た。ゴロンタロへは、イスラムは香料諸島のテルナテ島を経由して16世紀前半頃伝来しており、北スラウェシのイスラムの中心はゴロンタロであった。ムハマディヤが最初に影響を及ぼすのはゴロンタロであり、9月8日にムハマディヤ支部発足式が催されている。支部委員長にトム・オリイ、副委員長にはユスフ・オトルワが就任した。ゴロンタロ支部ではムハマディヤ学校を設立、イスラムの宗教科目と西欧式の普通教科による教育を行なった。

次に、第2章はムハマディヤ北スラウェシ地域全権委員会についての記述である。1934年、ゴロンタロにおいて第3回支部会議が開かれたが、これにはムハマディヤ中央本部副委員長ハジ・ムフタルも出席し、北スラウェシ全権代理委員会が成立した。コンスルにはトム・オリイが就いたが、マナド支部の代表も委員として加わっていた。トム・オリイは1934～56年までコンスルを勤め、著名なムハマディヤの地方指導者の一人として、多大な業績を残した。

第3章は、1970～87年までの北スラウェシ地域におけるムハマディヤ運動の現状についての説明。4章は、1928～42年までのマナドにおけるムハマディヤの歴史である。マナドのムハマディヤ組織が確立するのは1934年のことであり、グループとしての出発であった。前述したように、キリスト教徒の勢力が強く、ムハマディヤの組織は苦戦を強いられる。1967年、ジョクジャカルタのムハマディヤ中央本部決定により、北スラウェシ地域委員会がマナドに置かれた。この時以来、北スラウェシのムハマディヤ運動の中心はマナドに移った。

第5章で取り扱われるのは日本軍政の時代。この時代は、ムハマディヤ運動にとってはマイナス面が非常に大きかったと著者は言う。組織的な運動が認められていなかった。例えば、会議を開いたり、会員間でタブリグ（tabligh 宣教）活動をしたりすることは許されなかった。更に、北スラウェシ地域の2人の高名なムハマディヤ指導者が日本軍に対する反逆の罪で逮捕されている。ただ、ムハマディヤの教育活動については規制を受けず、自由にやれた点は良かった、と付け加えている。しかし、様々な面で規制が激しく、運動がやりにくかったことだけは確かなようである。

6章～9章にかけては、ゴロンタロやマナド以外の支部やグループの運動の歴史、あるいは1967年以降の北スラウェシ地域のムハマディヤ運動の実態が詳細に描かれている。

そして、最終章（10章）において、北スラウェシにムハマディヤが入ってきた理由として、(1)この地域にはイスラムを信仰している住民がいる。(2)組織は、ムハマディヤの中心地ジョクジャカルタで勉強した地元出身の若者あるいはジョクジャカルタからやって来たムハマディヤ教師によってもたらされた。(3)ジャワでは日常的にイスラムの闘いが続けられており、それがこの地に到来した。との3点を著者は指摘する。加えて、北スラウェシでのムハマディヤ運動を今後更に発展させるためには、将来の運動を担う若いリーダーたちの早期養成、及び組織の管理・運営をより合理的に行なうことの必要性を強調している。あと一つ、ムハマディヤ運動のドキュメント（記録史料）が散逸しないように、様々な工夫をこらしてほしいと歴史家としてのアドヴァイスも欠かさない。

以上が本書の概要である。ムハマディヤ運動がそれぞれの地域に及び、そ

の地で受け入れられ、いかにして根付いてゆくのかを理解するためには、これが格好の書であることは間違いない。冒頭でも述べたように、本書の上梓によりムハマディヤ研究の裾野が広がったことは確実のようである。

註

- (1) SEJARAH HUHAMMADIYAH, Majelis Pustaka Pimpinan Pusat Muhammadiyah, 1995.
- (2) Taufik Abdullah, SCHOOLS AND POLITICS: THE KAUM MUDA MOVEMENT IN WEST SUMATRA (1927-1933), Modern Indonesian Project Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca, New York, 1971.  
Dr. HAMKA, MUHAMMADIYAH di MINANGKABAU, Yayasan Nurul Islam, Jakarta, 1975.
- (3) マトゥラダ「南スラウェシのイスラム」(タウフィック・アブドゥルラ 編白石さや・白石隆訳『インドネシアのイスラム』めこん 1985年)
- (4) 拙稿「中部ジャワ北岸のムハマディヤ運動」(『史学研究』 第203号 1993年)  
拙稿「ムハマディヤ・バタヴィア(ブタウィ)支部の成立と発展」(今永清二編『アジアの地域と社会』勁草書房 1944年)